

八一年)の序論の中でも、中國都市への言及がない。  
 (4) オットー・ブルナー(成瀬治・平城照介ほか共譯)『ヨーロッパ——その歴史と精神——』(岩波書店、昭和四九年)。所收論文のうちⅫ、「ヨーロッパの市民とロシアの市民」は、その前章のⅪ、「ヨーロッパ史における都市と市民」と共に多くの示唆を與える。

(5) 伊原弘「江南における都市形態の變遷——宋平江圖解析作業——」(宋代史研究報告第一集『宋代の社會と文化』昭和五八年)。

(6) Jaques Gernet: *Daily Life in China—On the Eve of the Mongol Invasion 1250—1276*, Stanford University Press, 1962.

(7) アンドリュー・ポイド、田中淡譯『中國の建築と都市』(鹿島出版會、昭和五四年)。

(8) 森鹿三『東洋學研究——歴史地理篇』所收(東洋史研究會、昭和四五年)。

(9) 斯波義信「浙江湖州における定住の沿革」(『中國哲學史の展望と模索』一九七六年)。

一九八四年三月 京都大學人文科學研究所

B 五版 五一八頁

渡部忠世・櫻井由躬雄編

中國江南の稻作文化——その學際的研究——

足立啓二

本書は、一九七九年七月、京都大學東南アジア研究センターで開

かれた「江南デルタ・シンポジウム」における討論の記録である。まえがきによると、同シンポジウムは、東南アジア諸デルタの比較研究を行っている東南アジア研究センターのスタッフの呼びかけによって開かれた。長江下流域の農耕方式・水利開發等についての幾つかのテーマをたて、まず中國史研究者が概括的報告を行い、これに對し、生態學・作物學・地理學・氣象學等の研究者が、専門の立場から批判的な論點を提示し、これらを受けて討論が進められる。ある種の學際的討論にあり勝ちの、土臺についての考察を抜きにした文化比較とは異り、農耕方式の構成要素について具體的な檢證が積み重ねられる。この討論の進め方は、東南アジアを専門とするフィールド系研究者が、問題の焦點となる漢籍を事前に讀んで獨自の見解を準備されたことにもみられる参加者の積極的姿勢と相俟って、中國史では餘り例のない、この廣範な分野の研究者による學際的討論を、實り多いものとしている。討論で確認された成果はもとより、討論の過程でフィールド系研究者から出された多くの示唆に富んだ論點も、今後の中國社會經濟史研究の發展に、少なからぬ役割りを果たすものとなるらう。

本書は次の六章より成る。

第一章 火耕水耨をめぐって

第二章 宋・元代の圩田・圍田をめぐって

第三章 占城稻をめぐって

第四章 明・清時代の分圩をめぐって

第五章 商品作物の展開

終章 江南農業と日本

まず、章を追って紹介させていただく。ただ多數の参加者によるシ

ンボジウムという元來の性格上、論點は多岐にわたり、かつ錯綜しているため、論旨を網羅的にカバーすることは断念し、中國史研究者とフィールド系研究者雙方の基調報告の論點を軸に整理せざるを得なかった。また、江南稻作との比較で日本の稻作發展過程が論じられる終章は、ここでは省かせていただいた。

第一章では、まず西嶋定生氏が、火耕水耨とは直播き・休閒の水稲作で、『周禮』鄭玄注・『齊民要術』等を通じて、この基調は一貫しており、『晉書』食貨志の杜預の上疏からみても、當時の代表的な稻作技術であったという、氏の所説を展開される。これに對し、農業立地學の福井捷朗氏が、低濕地における粗放で自給的な水稲作は似通ったものであるとの前提に立って、火耕水耨に比定すべきものとして、サラワク低濕地の稻作技術を紹介される。陸稻焼畑の水田への適應によって生まれたその農法は、大鉦による除草のみで耕起を缺き、アナマキもしくはアナウエを行い、地力再生産と除草の見地から休閒を伴うものである。この比定を基礎に福井氏は、『齊民要術』の水稲作は、低濕地を對象にしたものでなく、また嚴重な水の管理を要する湛水直播きを行い、牛耕による整地を前提にするなどの點からみて、自然冠水・無耕起・アナウエとみられる火耕水耨とは別なものであるとされる。討論は必ずしも意見の一致をみていない。しかし、耕起・灌溉方式に関する福井氏の論點の幾つかを西嶋氏も認められているように、農學者の意見は、おおむね合理的である。本章のテーマ設定方法そのものが自明のこととして「火耕水耨は低濕地農法である」という前提には、大いに疑問があるが、第二章・第三章の討論に照らしてみても、陂灌溉による支谷部の水稲作と、デルタや山麓部の水稲作が、異った發展の道筋をたど

って来たこと、先進的であり従って規定的な水稲作技術は陂灌溉下のそれであったことは、信頼度の高い假説である。漢・六朝期の社會構成を解明するための農業史研究に必要なのは、もはや火耕水耨の注に疏を重ねることではなく、米田賢次郎氏も討論で言われているように、陂渠灌溉下の進んだ地域を中心に据えながら、「文獻をとおしてみた後漢から南北朝にかけての農業技術」そのものを解明することであろう。その際、本章において農學者から示された、初期水稲作における諸技術の相互關連・體系は、分析の手掛りとして大いに役立つであろう。また天野氏が言われる考古學上の成果も、耕地の存在形態・灌排水の機構・農具・品種等について、多くの具體的な素材を提供するであろう。

第二章では、宋代の圩田・圍田の存在形態から、宋代江南の稻作が論じられる。東洋史の側からは、川勝守氏によって、國家の築造した堅固な堤防に圍まれ、水路や道路によって規則的に區分された耕地を持つ、巨大で整った江東の圩田像が報告される。更に、この圩田は宋代を通じて安定的に維持されていたこと、浙西においても、北宋期に私的に作られた圩田・圍田が、南宋期には國家權力の介入によって維持されたこと、また、圩田・圍田の造成によって乾田化が進み、二毛作展開の基礎となったこと、などが主張される。こうした見解に對し、地形學の高谷好一氏は、まず長江下流地域を、凹地・平地・砂丘地帯(微高地)・臺地・氾濫原・支谷等に區分することから始められる。この區分をもとに、支谷の陂灌溉地帯、江東氾濫原の圩田地帯、浙西凹地の圍田地帯を特徴づけ、江東圩田地帯についてみると、天目山系の出水を受ける氾濫原に巨大な構造物を作ることは水文的にあり得ず、圩岸とは自然堤防を少し改

修した程度のものに過ぎず、しかも初歩的な堤防さえ、出水に備えて上流に面した部分だけが整えられ、下流部に向つては開いた構造となつていたことなどが、漢籍と清末の地圖の両面から明らかにされる。また、圩内は整備されておらず、巨大な游水地があつたことも指摘される。このような圩の構造は、同地方における降雨と排水條件からも必然的であつたことが、灌漑排水學の海田能宏氏等によつて裏付けられる。浙西の圍田については討論は煮つめられていないが、農學者からは、浙西凹地の圍田とは、給水・排水用のクリークによつて仕切られた田に過ぎず、急激な出水がなく、雨季と乾季の水位差の少ない同地方では、高くて強固な堤防は意味がないと主張される。

本章においてなされた支谷・氾濫原・凹地等の地域區分と、それぞれの地域の農業條件の明快な特徴づけは、次章以下の議論の前提を作つただけでなく、中國社會經濟史の踏まえるべき共通の足場を作つたと言えよう。様々な史料が、今後、一先ずこれらの區分に照らした上で、議論の素材として用いられねばならなくなるであらう。また江東の圩田に關する限り、それが自然堤防を基礎とした、未耕地を大量に含む、かなり不安定なものであつたことも、ほぼ共通の認識になつたと言えよう。荒廢の危険をはらみつつも、大量な勞働力を集中して國家的規模で圩田が造成されたこと自體、その歴史的な意義は認められねばならない。しかし、とかく通念されてきたような整備された水利田と集約的水稻作というイメージが修正されたことは、中國史上における宋代の位置を考える上で、興味深い論點を提示するものであらう。

第三章では、宋代江南の水稻作の發展水準という前章での論争點

が、占城稻の品種的な評價を軸に、新たに展開される。斯波義信氏による占城稻の特性と分布に關する報告に續き、作物學の渡部忠世氏が、占城稻とは、感光性の弱いインド種（インディカ・アウス）に屬する一つの生態型であり、水旱に耐える原始性を持つた「つまらない稻」であることを明らかにし、このような占城稻が江南東西路の八〇九割を占めていたことは、宋代の江南デルタの多くは、耕地整理も灌漑設備もきわめて不備な地域であつたことを意味するとされる。この説は、江南デルタの天水田は、稻作を支えるギリギリの雨量しかないという、氣象學者の報告によつて補強される。

占城稻が主要に栽培された圩田地帯の粗放性については、討論はほぼ結論をみたと言つていいようである。他方、占城稻が本格的には展開しなかつた浙西デルタ中心部については、中國史からの參加者と農學者の見解は相當に隔つてゐる。長江下流の開發の經緯についてみても、唐代以前は支谷部こそが生産力的に中心であり、上供米の供給源であつたという點では兩者は一致しながらも、唐代から浙西の平地や凹地の開發が進み、宋代には支谷部との生産力的な逆轉が起きるといふ斯波義信氏らの見解は、デルタは依然として粗放な稻作であつたとする渡部氏らの見解と對立しつつも、決着をみていない。宋代長江デルタを粗放な農業地帯であるとするフィールド系研究者達の主張が完結するためには、浙西凹地についての本格的検討が必要であらう。その結果は、生産力的にも社會構成上も、浙西を最先進地として基軸に据えてきた宋代史評價の當否に大きく關するものと言えよう。

宋代浙西の生産力水準に關するこの見解の對立は、第四章の明清時代の分圩に關する討論の中で、分圩の動機についての評價の分岐

として現われる。濱島敦俊氏は、概要以下のように報告される。明代中期以前、江南の圩田水利は、圩内の田土のうちクリークに面した条件の良い土地を所有する在地の手作り地主層によって擔われており、水利負擔は、田頭制と呼ばれる、クリークに面した土地の所有者が圩岸修築の責任を負う體制をとっていた。ところが明代中期以降、手作り地主の没落とともに水利の荒廢が生じ、佃戸などの小農中心の村落では大圩の維持が困難になったため、國家の介入によって圩の分割が行われる。それにもなつて、全ての耕地がクリークに面するように圩内耕地が再編成され、水利の勞役負擔も、耕地面積に比例する照田派役制に移行する、と。これに對し、灌溉排水學の海田能宏氏が、タイのチャオプラヤデルタにおける運河形成史を紹介することを通じて、低濕地の開發の道筋を示される。チャオプラヤデルタでは、水路は當初、灌溉排水のためにではなく、物資輸送のための運河として現われ、行くための運河・住むための土堤が作られた段階で、既にデルタ全體が耕地化される。運河が農田水利のために利用されるのは、商業化が始る一九五〇年代以降で、この段階ではじめて圍堤が作られ、低地への個別的灌排水と、肥料の利用が始る。集約化・土地利用の高まりこそが、排水路形成を目的とする分圩をうながすとして、社會關係の變化を分圩の動機とみなす濱島氏と對立している。なお森田明氏は、分圩の動機を、海田氏同様、集約化に求めておられる。

宋代には既に、二毛作や施肥が可能なまでに圩内の乾田化・集約化が進んでいたという立場からすると、分圩は、圩の集約的利用のためよりも、社會的條件の變化にその理由が求められることは、自然であるのかもしれない。圩の集約化を分圩の動機とみなす農學者

にとつては、それに先行する宋元時代の圩田の粗放な利用形態が前提條件となる。討論の中でも述べられているように、長江デルタとチャオプラヤデルタの間には、自然条件でも歴史的條件でも、大きな相違があることは確かであろう。しかしながら、「總體に明中期の手作り地主は明末以降に比べて規模が小さい」（一八二—一三頁）と言われる在郷手作り地主が、佃戸などの小農民では連絡できにくいほどの「非常に廣域にわたる大圩というもの」（一九七頁）を、果して、かつて自律的に管理し得ていたのかなど、分圩をうながした社會的諸關係の變化といわれるものを、充分に理解し得ない私には、雙方の論點は、第二章以來の論争點に立ち歸つて解明を要するよう思われる。

第五章では、明代以降展開した浙西微高地の棉作、凹地の桑栽培について討論が行われる。棉—麥二毛作が成立するか否かなど、若干の見解の對立がみられるが、本章にはとりたてて對立點はなく、棉作等への轉換を、それぞれ社會的・自然的條件から確認している。

以上の紹介によつても明らかなように、本シンポジウムを通じて、従來中國史において或る種通説的地位を占めていた學説もしくは歴史像は、重要な修正を迫られることとなった。農學者と歴史學者の間で一致をみるに到らなかつた論點についても、多くの再考を文獻史學研究者は求められているようである。これは本書の大きな成果であり、本格的な實證によつて確定が望まれるところである。

しかし翻つて考へるに、中國を直接の研究對象としないフィールド研究者達によつて、かくも容易に通説の一角を解體させられたことについて、反省すべき點はないであろうか。農學者・地理學者と

の遭遇がかくも新鮮であったことは、戦後中國史研究の理論と方法に、その根據の一端を持っているのではなからうか。戦後歴史學の一つの有力な潮流であった、スターリンの理解に基く史的唯物論の定式においては、その生成の歴史的條件に規定されて、生産力と生産關係が分斷され、生産力は機械的生產手段に、生産關係は生産手段の法的所有關係に、それぞれ一面化された（中國史研究會編『中國史像の再構成』總論第一章參照）。そこでは、生産者と生産手段の結合のあり方、即ち人と自然との物質的代謝關係とは切り離された、人と人との關係だけが、歴史學の研究對象とされ勝ちであった。生産力が「生産關係」との關りで中國史研究の俎上に登る時に、生産力のあり方に規定された人と物の結合形態という媒介を缺いているため、「多毛作化」「耕地の擴大」「商品生産の發展」等が、「均田農民の分解」や「佃戸の自立化」に、無媒介に結びつけられることが多かった。極言すれば、生産力論・生産様式論は、構造的である必要もなかったし、重要でもなかった。

スターリンの定式はまた、高橋昌明氏が明らかにされているように（『日本中世農業生産力水準再評價の一視角』『新しい歴史學のために』一四八）、生産力の構成要素から労働對象を除外し、労働手段のなかからは生産の脈管系統を除外して、生産の筋骨系統・即ち道具や機械という労働用具に限定し、生産力を労働力と労働用具に限定した。労働對象としての土地や作物、労働手段としての土地や水や肥料などは、當然生産力の構成要素からは除外された。水利研究が、しばしば水利のための労働力負擔のあり方を通じて地主佃戸關係を分析する手段となったのも、當然であった。天野元之助氏・周藤吉之氏の研究は、取りあげられた生産力諸要素の豊富さの面

において、極めて先驅的な成果であったといえよう。

こうした研究史に照してみて、水・土地・品種などといった労働對象や労働手段が、生産力の構成要素として評價され、相互の有機的關連のもとに、各々の歴史的時代における農耕方式の中に位置づける討論が、本シンポジウムにおいてなされたことは、人と自然の結合關係の歴史的發展についての理解を豊富化・具體化し、ひいては生産様式全體の理解を深める上で、重要な足がかりを與えるものと言えよう。

勿論、長江デルタの農業技術發展を理解するのに、東南アジアデルタの農業技術をそのままではめることは、自然的條件の差からしても無理がある。これは討論の中でも、しばしば指摘されている。また歴史的にみても、東南アジアデルタの開発は、帝國主義段階に到達し、植民地・半植民地的從屬に組み込まれて以降、本格的に推進されたものである以上、そこでの技術も開發プロセスも、本質的には近代的现象である。二千數百年に及ぶ小經營生産様式の發展を持ち、それを基礎とした專制國家の下で、小經營による多量の労働力の先行投資がなされてきた中國とは、質的な相違がある。更に、「事象の個別性に拘泥して、むしろ多様な環境に各時代ごとの社會がどのように適應していくのか」という點を重視し、「稲作は多様なものだから、一般的な發展法則を定立することは本來無理である」という立場に立つ生態學者の見解が、生産様式の發展過程を各地域に即して再構成しつつ、支配的で先進的な生産關係を明らかにしようとする歴史學に、そのまま流用できないことも言うまでもない。本書における農學者達の提起を參考にしながら、多様な農耕方式とそれを構成する生産力諸要素を、歴史具體的に確

認し、歴史的に組み直していく作業の責任は、當然歴史學研究者の側にある。

そのような作業は、文獻によって果して可能なのか、という疑問が、本シンポジウムの席上、しばしば歴史學者の側から發せられている。時には「文獻を相手に歴史學なるものが成立するかどうか」とまで言われている。初學の私には文獻の限界を定かに論じ得ないが、文獻史學にその固有の役割りを認める以上、まず問い直すべきは、文獻そのものの理解と評價が果して正當であつたか否かである。シンポジウムにおける口頭發表という性格上から止むを得ない面もあるが、文獻史學の報告における文獻上の疑問が、まゝ見受けられる。宋代を通じて江東の圩田が安定していたことを實證するには、『宋會要輯稿』と『建炎以來繫年要錄』を對比させる方法は不適當であり、對比の結果は圩田造成の意義の少なかつたことを示しているなど、その幾つかは既に中國史以外の發言者によって指摘されている。最後に、この紹介で取りあげた主要な論争點に直接關する文獻上の疑問の中から、一二をあげて結びにかえさせていた

く。

第一章で『史記』貨殖列傳の記事が、「楚越の地は火耕して水耨す」と紹介されている(九頁)。しかし原文は、楚越の各地における多様な習俗を述べた後、「總之。楚越之地。地廣人希。飯稻羹魚。或火耕而水耨。」と言う。少なくともこの史料は、紹介されているように、楚越の地が一般に火耕・水耨を行つていゝと言つてゐるのではない。「或いは」火耕・水耨してゐると言つてゐるのであつて、火耕水耨以外の農法が一般的に存在していることを、火耕水耨の史料そのものが示唆してゐる。

第三章では、「陳旉の『農書』上の『耕耨之宜篇』の第二および第三によれば、圩田・圍田のなかには當時あきらかに二毛作が展開されている」と主張されている(七四頁)。これが地勢之宜篇第二と耕耨之宜篇第三のことを言われているのであるなら、そこで二毛作を讀み取り得るのは、耕耨之宜篇第三の「早田」の部分だけであるが、これが圩田・圍田であることは果して明らかなことであらうか。少なくとも凹地である「平陂易野」は、冬期も積水し、春濁によつて地力が再生産されるような土地であると、同じ耕耨之宜篇で陳旉は言つてゐるのである。宋代浙西の生産力水準の理解に關する問題である。

自然科学者と歴史學者による、古代から近代に及ぶ廣範な學際的討論ゆえに、紹介者の無知による誤解が多々あるのではないかと恐れている。また錯綜し・變化發展する論旨を簡略化したため、内容の豊富さを傳え切れなかつたことと思う。いずれもどうか御海容願いたい。本書各章の冒頭には、編者による明快な要約が附されてお

り、本書を大變讀みやすいものにしてゐる。豊かな論點は直接お讀みになることをお奨めして、拙い紹介の筆を擱きたい。

なお本稿は、八四年夏の中國史研究會における討論を參考にして、足立の責任においてまとめたものである。

一九八四年四月 東京 日本放送出版協會

A五版 三〇七頁 三八〇〇圓